

[SPF 豚農場紹介]

伊藤 SPF 豚農場

1. 農場

所在地：長崎県南高来郡西有家町見岳 1,282

名称：伊藤 SPF ファーム

経営者：伊藤 春治 (53)

島原半島の西側に位置し、現在注目を集めている普賢岳の裾野にある。土石流、火砕流で大きな被害を出している水無川に近い。

2. 農場の歴史と概要

養豚事業への取り組みは昭和45年(1970)、伊藤さんが29歳のときであった。当時伊藤さんは密柑とメロンの栽培農家であったが、畜産との複合経営をめざして養豚経営を取り入れることにしたのである。養豚経営の経営規模は母豚20頭による一貫経営であった。

昭和52年(1977)、糞尿処理や公害対策の見地から、養豚場を民家から離すことを目的として、仲間6名と共同で肉豚肥育団地(1単位200頭×6=1,200頭)をつくった。この時点で伊藤さんの経営規模は母豚30頭になっていた。6名はいずれも一貫生産を行っており、現在も4名が頑張っている。

昭和54年(1979)に母豚100頭に増頭したが、用地の関係で豚舎が3カ所に分散し、労働生産性の面で苦勞することとなる。

そこで、昭和62年(1987)農場を1カ所に集約し、さらに母豚を100頭増頭して、200頭による専業経営とすることを決断し、思い切ってSPF豚に変換することとした。

昭和63年(1988)に農場建設に着手し翌平成元年(1989)3月に完成した。同年4月より8月までの間に妊娠豚および育成豚200頭の導入を完了した。

6月下旬より分娩が開始されたが、始めのうちは順調に見えた分娩成績も、次第に黒子の発生が目立ち始め、日本脳炎によるものと診断された。その後の調べにより、伊藤さんに責任はなく、妊娠豚をつくる際のワクチン接種の時期に問題があったことが判明した。それやこれやで農場の立ち上がりが遅れ、正常な分娩になったのは翌平成2年1月からである。立ち上がりの時期の躓きは精神的にも経済的にも大きな負担となり、一時はSPF化を断念することも真剣に考えた伊藤さんという。現在は後述のように母豚200頭余によって、順調に生産が続けられている。

3. 飼養豚母豚の廃用(更新)率と産次構成

導入したSPF種豚は予想以上に丈夫ではじめの4年間(1992年まで)の廃用率はかなり低く、5年目になって31.7%となった(表1)。

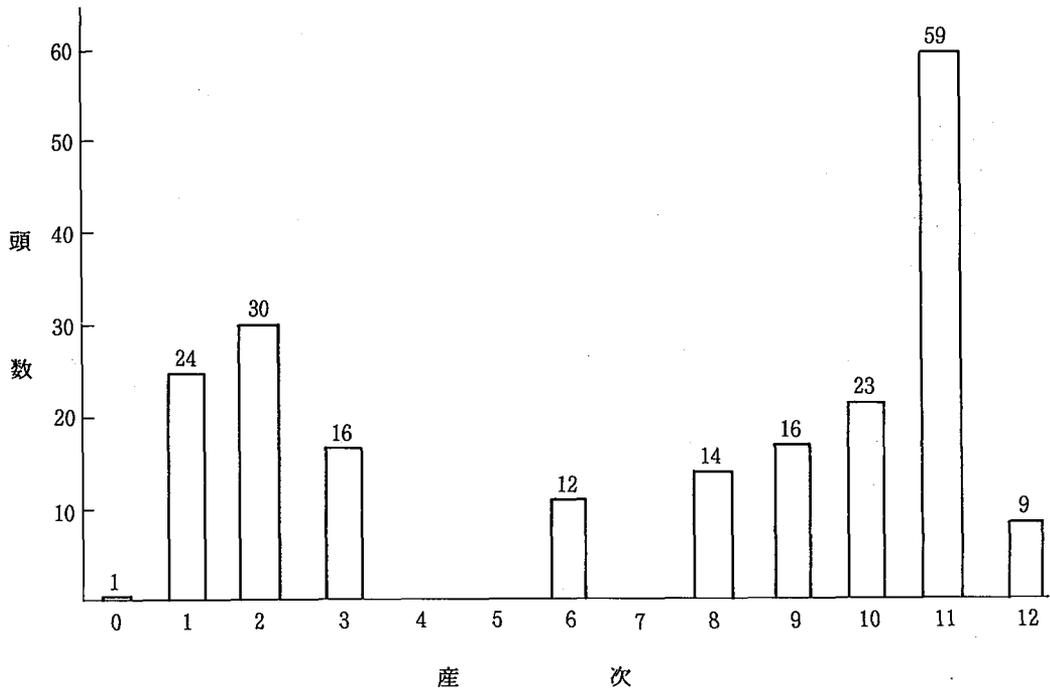
計画的な種豚更新を怠ったこともあって、平成5年(1992)9月現在の母豚の産次構成は図1に

表1 飼養種豚数および廃用率の推移

	1990年	1991年	1992年	1993年
母豚数	209	209	204	205
雄豚数	13	12	12	12
廃用率 ♀	8.1	19.1	20.1	31.7
♂	15.4	33.3	25.0	33.3

1993年度分は年率に換算

図1 産次構成グラフ



構成比	0.5	11.8	14.7	7.8	0.0	0.0	5.9	0.0	6.9	7.8	11.3	28.9	4.1
-----	-----	------	------	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	------	------	-----

示すようにアンバランスになっており、これを正常な形にもっていくためにはまだ数年を要するものと思われる。

4. 繁殖成績

生産が軌道に乗った平成2年(1990)以降の繁殖成績を表2に示した。分娩数、哺育開始頭数、母豚回転数等いずれも安定した高い数値を維持している。

子豚の哺育成績(表3)も良好で、1母豚当りの年間離乳頭数が26頭を超えた年(1992)もある。ただ哺育率が年々下降気味なのが気かりではあるが、これは母豚の産次が進むにつれて子豚

表2 繁殖成績の推移

	1990年	1991年	1992年	1993年
分娩数	492	504	499	486
哺育開始頭数	5,282	5,716	5,751	5,478
一産当たり	10.7	11.4	11.5	11.3
母豚/年	25.3	27.3	28.2	26.7
母豚回転数	2.36	2.41	2.44	2.37

1993年度分は年率に換算

表3 子豚哺育成績の推移

	1990年	1991年	1992年	1993年
離乳腹数	478	490	505	483
離乳頭数	4,803	5,112	5,331	4,932
一産当たり	10.05	10.43	10.56	10.21
母豚/年	23.0	24.5	26.1	24.1
哺育率	93.7	91.6	90.7	90.4

1993年度分は年率換算

のバラつきが増加することによるものであり、産次構成が是正されるにしたがって解決するものと思われる。

5. 肉豚出荷成績

平成2年(1990)は繁殖成績が軌道に乗った年であり、肉豚の出荷が正常になったのは翌年からである。出荷頭数が平成3年(1991)23.1頭、平成4年(1992)26.0頭となり、本年(1993)も昨年と並の出荷頭数が期待されている(表4)。

6. SPF豚変換のメリットと反省点

1) SPF豚変換によるメリット

伊藤さんによれば SPF産に変換してのメリットは数多くあるが、その主なものは次の通りである。

- ① コンベンショナル養豚時代には、1母豚当りの肉豚出荷頭数は、年間19頭までが限界であったが、SPF養豚になって25頭出荷を自信を持って経営計画に盛り込むことができるようになった。
- ② 疾病の発生が激減し、病豚の治療(投薬、注射)がほとんどなくなった。
- ③ 飼料添加剤の使用がなくなった。
- ④ 飼料効率が改善された。

ちなみに1992年度の農場飼料要求率は2.98、肉豚飼料要求率は2.61であった。

2) SPF豚変換時の反省点

- ① 変換後の立ち上がりを急ぐあまり、妊娠豚導入を実施したが、トラブル発生のため、生産を軌道にのせるのが逆に遅れ(約半年)てしまった。
- ② SPF豚変換時の売上げストップは、数カ月の範囲ならば、変換後の生産性向上によって簡単に取り返せるのであまり恐れる必要はない。
- ③ 立ち上がりを急ぐよりも、SPF豚変換計画を着実に実行することが大切である。

表4 肉豚出荷成績の推移

	1990年	1991年	1992年	1993年
肉豚出荷頭数	3,573	4,839	5,313	
(1母豚/年)	17.1	23.2	26.0	
格付け				
上	74.1	68.3	66.6	
中	15.2	18.1	21.2	
並	10.3	13.2	11.7	
等外	0.4	0.4	0.5	

(文責：赤池洋二)

